

2018年2月8日

2017年度 琉球弧研究支援 報告書

研究テーマ「渡嘉敷唯選の誕生—家族史的背景とその時代—」

人文学部こども文化学科 新垣 基

I. 初めに

渡嘉敷唯選（1886—1927）は沖縄県出身の画家である。彼の存在を知ったのが2016年の頃であった。もともと私の祖父のシベリアでの体験を綴った日記についての調査をしていた。祖父の資料を探る中で、祖父が大事に取っていた一枚の写真があった。それが渡嘉敷唯選であった。昨年は渡嘉敷唯選を探求する研究であった。今回はさらに時代をさかのぼる研究にしたい。

II. 研究目的、動機

本研究は、昨年の琉球弧研究支援において、渡嘉敷唯選の生い立ちやその姿を様々な資料や聞き取り調査で垣間見ることができた。さらに、昨年の研究において曾祖父の渡嘉敷唯選だけでなく、他にも身近に画家がいることに研究を通して知ることができた。そこで一つ疑問に感じたのは、渡嘉敷唯選や身近な人が画家になったのはその前の代から画家に何らかの関係する仕事をしていたのではないかと考えた。よって本研究では、画家を多く輩出した渡嘉敷家のルーツを調査していくものとする。

III. 研究方法、地域、期間

1) 研究方法

文献調査（場所：沖縄大学図書館、沖縄県立図書館、那覇市歴史博物館）

2) 期間

7月～8月 文献資料収集、文献資料読み込み

10月～12月 文献資料読み込み、論文の作成

IV. 結果

1) 琉球王国と家譜

沖縄がまだ琉球王国という独立した国であった時代、琉球に家譜や系図といった記録を残す文化はなかった。1609年薩摩藩が琉球を侵略した。いわゆる琉球侵攻である。以後、実質的な支配下に入った琉球であったが、その時日本の様々な文化も同時に琉球へとやってきた。家譜もその一つである。そもそも家譜とは『沖縄大百科事典』によると「近世期、士族が有した家計に関する記録。系図ともいう。一族（門中）ごとに特定された姓を冠して作成された。本家および分家においても作成され、各系祖以

下の各人の戸籍（世系）、履歴（記録）をおもな内容とした。」とある。さらに同辞典には、「沖縄本島系（首里・那覇・久米・泊村士族）は約 700 の系統で約 3000 冊あった。[中略]1689 年に士族層に家譜編集が命ぜられ、ここに後代につながる家譜の原型、編集のシステムが完成されていった。90 年に門中ごとの姓が、ついでえ名乗頭字も特定された。また恒久的な家譜を菅掌する機関として初めて系図座が設置された。諸士は家譜を 2 部作成して提出し、1 部は王府の頒賜認定を示す御朱印（首里之印）が押されて下賜され、1 部は系図座に保管された。1720 年（尚敬 8）には 5 年に 1 度の仕次（追加編集）が定められて家譜の連続性も確認された。」となっている。

琉球王国において家譜の存在は自分の身分を明らかにする証明書であり、士族を表す重要なものであった。

2) 家譜から見る渡嘉敷家

私の先祖である渡嘉敷家の家譜は存在するのであろうか。答えは存在する。正確に言えば存在していたということになる。なぜなら第二次世界大戦により私の先祖の家譜も含め沖縄の多くの家譜は失われてしまったのである。しかし渡嘉敷家の家譜は失われていたものの渡嘉敷家のさらに大本の先祖の家譜が現在でも残されていたのである。『譜代貝姓家譜 大宗 高里家』である。大宗高里家に関して『琉球家紋系図・宝鑑』でこう記されている。

貝姓の元祖新川筑登之親雲上唯元の出自を訪ねると、首里汀志良次村に住んでいた、瀬底親雲上に至るといふ。彼は瀬底村の地頭を勤めていた所から瀬底を姓を名乗り、彼の長男は新川親雲上を称し、平等大屋子の職にあったが、後に与那城間切りの地頭職を任じられ、その後新川地頭に転任したといふ。この新川親雲上の子は新川筑登之親雲上を称し大台所大屋子の職にあり、彼の子新川子は一男一女をもうけた後他界したといふ。親に先だたれ残された姉弟は苦勞し御先祖代々住みなれた首里から那覇若狭町に移り住んだといふ。姉が親代わりに育てた弟、後の与那城筑登之親雲上と東風平間切、新城村の仲村渠掟親雲上の娘思玉との間に生まれたのが貝姓の元祖、新川筑登之親雲上唯元であるといふ。唯元は若狭町に住む、金城掟親雲上の娘真牛を妻に三男二女をもうけている、長男唯記、次男唯満、三男唯喜、と二女がある。長男唯記は父の跡を継ぎ、次男唯満は分家し渡嘉敷家の系祖となり、三男唯喜も分家し、金城家を創設した。貝姓同門の分家姓には、高里、福地、金城、渡嘉敷などの姓があり同門子孫男子の名乗頭は唯である。

渡嘉敷唯選の出身地も那覇若狭町であった。貝姓の元祖新川筑登之親雲上唯元の父親、与那城筑登之親雲上のころから若狭町に住んでいたことになる。

さらに『門中風土記』には貝姓（福地家）に関してこんな記述がある。

〈同門中では、渡嘉敷、金城両家も栄えている。子孫の広がり最も多いのが渡嘉敷

の系統。廃藩置県後は主に官公庁関係に多くの人材を出しているという。金城家の系統は旧藩時代から現代に至るまで、漆器づくりでも多くの功績をのこしている。何世かは不明だが、「金城筑登之唯福」という人物はその技術に秀で、薩摩に教えに赴いている(『球陽』)。同門中「貝姓」の由来も、この貝摺師・唯福の技術が秀でていたことによるもので、国王から賜ったという言い伝えである。)

次に、貝姓の元祖新川筑登之親雲上唯元や渡嘉敷唯選にも縁のある若狭町について述べていきたい。

3) 若狭町の歴史

若狭町には近くに久米もあり多くの文化が行き交う町であったのではないだろうか。角萬漆器の創業者で嘉手納漆器店六代目の嘉手納並裕は『私の戦後史』で若狭町についてこう語っている。「私が育った若狭町は、戦前は若狭といえば漆器、漆器といえば若狭といわれるほど、沖縄でただ一つの「ヌイムンマチ」(塗り物町)として知られていた。」

若狭町は漆器の町として多くの職人が育ったのではないか。また、渡嘉敷唯選の娘、山元文子は『新生美術』の中の「父のこと」というタイトルのエッセイで、「渡嘉敷家はもともと漆塗りの職人で、祖父は図柄描きだったそうです。」ということも語っている。漆器の職人だけでなく、若狭は芸術家も多く住む町でもある。渡嘉敷唯選もその一人であるが、他にも画家に比嘉華山や浦崎永錫、島田寛平らがいた。また石垣島出身の音楽家宮良長包も若狭に住んでいた。このように若狭町には多くの職人や芸術家の生まれ育った町であり、住む町であった。

V. 考察、分析

今回の研究において、渡嘉敷唯選が画家であったことのルーツは漆の町であり芸術の町若狭という場所に生まれ育ったこと。また、同門中金城家の金城筑登之唯福が琉球王府の貝摺奉行で貝摺師であり、唯選の父親も漆の職人だったことから、他にも同じ門中の中で漆器の職人、またはそれに限らず芸術関係の人間がいた可能性は高い。ともかく幼いころから芸術に触れる機会が多くあり、その影響により画家という絵描きを目指す人が出てきたのではないだろうか。

VI. 今後の展望

昨年度と今年度の琉球弧研究により、私の家族のルーツについて研究をし、多くのことを知ることができた。しかし、研究を重ねれば重ねるほど、さらにわからないことが増えていくものである。今後はさらにこれまで調べたテーマを再考し、より深く研究していきたい。

VII. 終わりに

今回の研究で、渡嘉敷唯選の画家としてのルーツを研究した。その中で、もう一つの

我が家の謎も解決することになった。それは渡嘉敷というのは私の母方の祖父の家系なのだが私の祖父は新川という苗字を名乗っていた。祖母に聞くともともとは渡嘉敷であったが戦前に新川に変わったのだという。確かに戸籍には〈昭和拾五年月日不明附許可によりその氏、「渡嘉敷」を「新川」と変更〉と記されている。新川というのはどこから来たのだろうかという疑問であったが、今回の研究により「貝姓の元祖新川筑登之親雲上唯元」から取ったというのが有力ではないかという答えに行き着いたのである。過去があって今がある。まさに歴史を知ることは今、そしてこれからを知るうえで重要なことではないだろうか。その想いを胸にこれからも研究に邁進していきたい。

VIII 参考文献/引用文献

- 『沖縄大百科事典』上（1983年）沖縄タイムス社 747頁
- 『琉球家紋系図・宝鑑』 沖縄家紋研究会（1992年）
- 『沖縄門中大事典』 那覇出版社（1998年）
- 『門中風土記』 多和田真助（1986年）
- 『譜代貝姓家譜 正統』（那覇市歴史博物館所蔵）
- 『貝姓(氏)渡嘉敷家門中録』 渡嘉敷唯賢（那覇市歴史博物館所蔵）
- 『私の戦後史』第5集 沖縄タイムス社（1981年）
- 『新生美術』創刊号 新生美術協会（1982年）

IX. 指導教員コメント

新垣基さんの研究は、自分の曾祖父である渡嘉敷唯選への興味から始まり、彼の生きた時代や家族の歴史を紐解いていくというとてもエキサイティングで興味深いものです。昨年度明らかにした渡嘉敷唯選という人物だけでなく、今回はその人物を生み出した家族の歴史という視点から様々な文献を調べ上げ、かなりの成果を出しています。このフレッシュな研究態度に我々も学ぶ必要があるのではないのでしょうか。今後の研究も楽しみです。